

稲刈り祭に227人、最多を更新

9回目の稲刈り祭が10月11日に催されました。晴天に恵まれ、親子連れを中心にスタッフをふくめ227人が参加、最多記録だった去年の160人を大幅に更新しました。

スタッフ22人は朝7時半に集まり、スズメ除けのネットを外し、灌漑水路に架けた厚板の安全を点検、補強して、市民の参加を待ちました。



9時前、親子連れが受付の前に列をつ

くりました。農家生まれのスタッフ、内藤登機彦さんが刈り方、稲の束ね方を説明。参加者は用意された鋸鎌（のこぎりがま）を持ち、思い思いに6枚の田んぼ（面積計8アール）に散って刈り始めました。



1週間前に台風18号により約200ミリ、週半ばにも数十ミリの雨が降り、田んぼはぬかるんでいます。参加者たちは長靴を脱ぎ、はだしになって刈り始めました。稲を湿った泥の上に置くと、穂に泥が付くので、ブルーシート、プラスチック製ソリを各田んぼに配置し、その上で束ねてもらいました。



子どもたちはひざ下まで泥につかり、ときには悲鳴を上げながらも、刈った稲を誇らかに空にかざします。親たちが受け取って束ねました。

市民も稲束を運んだ

来年4月の都市林公園開園に備える市の整備工事が始まって、御所谷入り口広場が使えず、刈った稲を架ける「はさ」は田んぼに沿って組み立ててありました。ことしは参加市民のほぼ全員が進んで、稲を「はさ」まで運びました。子どもたちも両手で抱えたり、稲束を数株ずつ架けた青

竹を2人で担いだりして、運搬に加わりました。

ぬかるむ田んぼで刈り取りに手間取った半面、運搬、はさ架けが手際よく進み、11時半には稲束全部を架け終わりました。「かまくら緑の探偵団」の親たちが、去年の収穫米で握った1人2個ずつのおにぎり、缶ビールや飲み物が、作業終了を待っていました。

はさの前に敷いたブルーシートや持参したレジャーシートの上で、家族ごとに緑地の恵みを賞味しました。

稲束は2週間ほど、天日（日光）に当てて乾燥させ、脱穀→粳摺り→精米のあと、11月22日（土）の収穫祭会場で薪で炊いて、おにぎり、お餅を作り、実費で提供します。

広町田んぼの会

